

Title	希臘の二大史家
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎(Tanaka, Suiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1921
Jtitle	史学 Vol.1, No.1 (1921. 10) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:ヘロドトスとツキヂデスの両面塑像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19211000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



すでちきつ

すとせろへ

史學

第壹卷 第壹號

大正十年十月

希臘の二大史家

慶應義塾大學文學部史學科同人今回相謀て雜誌『史學』を公にすることとなり創刊號の卷頭希臘の二大史家ヘロドトス、ツキヂデスの兩面像を掲ぐ。大理石彫塑の原像は原來フアルネエズ家出身羅馬法王パウル第三世の遺愛の一にして現にナポリ博物館に陳列せらる。吾人『史學』の同人は少くも專攻學科に於ては東洋は遠く西洋に及ばすと云ふが如き言を爲すものに非ずと雖も、而も亦彼の長を強て認めざらんとするものに非ず。司馬遷、班固固より讀まざる可からず、然れどもヘロドトス、ツキヂデスに就て學ぶ所豈に乏しからんや。

碑銘に録するに帝王の武功を以てし廟壁に刻するに歴代の尊稱を以てせるは史實を後世に傳へんとの意に出でしものにして埃及、アッシリアの昔に於ても既に之を行へり。然れども西洋史學の淵源は他の諸般學術に於けると同じく又之を希臘に求めざるを得ず。但ホメロスの詩篇は聽者の詩的空想を満足

せしむると共に史的興味をも亦充足せしめしが故、却て希臘人をして久しく現代史の述作に思を及ぼさしめざりき。而も亦詩人の間には或はヘシオドスの如く秩序を立てて古傳を咏せんとせる系譜詩人の出づるあり、或はアリストタイオスの作なりと傳へたる異邦の風土を歌へる竹枝の現はるるあり、イオニア地方に批評的學術の起りて神話と歴史との區別論せられ、波斯の政權西方に擴張せられて、希臘人の間に東洋の地理歴史新に研究せらるることとなりて、遂に西紀前第五世紀に入りて歴史家ヘカタイオスを出せり。その作世界地圖は寧ろ各國の地誌と目す可きも又當代の事蹟を叙せるが故に近世史の體を創めたりと云ふ可く且別に希臘の古代史をも編みたり。而して何れもこの頃新に起れる散文もて記せるが當時は韻語詩人 *epopoioi* に對して廣く散文詩人 *logopoioi* のうちに數へられて未だ特に歴史家と呼ばるるに至らず、ホメロス詩篇に訴訟の起りし際 *histor* に訴へて事實の審理を乞ふの條あり *historie* とは當初この種の審理を意味するに止まれり。ヘカタイオスの古代史とは神話を基礎とし之に多少の批判を加へたる系譜なりしが、次で希臘の古代史を撰述せるものは何れもその影響を受けて叙事詩に咏せる神話の範圍を脱すること能はざりき。この神話學者たるの資格を離れ歴史家としてのヘカタイオスの著作に倣ひて東洋史を研究し波斯史等を編纂せる一二の人は叙述を進めて現代史をも併せて記述したり。次で第五世紀の後半にはシラクサのアンチオコス、シチリア伊太利の古代史を究めて希臘文明世界の現代史に及ぼし、レスボスのヘラニコスは希臘波斯兩方面の歴史をも、西紀前六八三年以來の年代紀を秩序的に叙して後の研究者に便宜を與へたり。その年代紀は固より悉く信じ難しと雖も紀年を経として史實を悉く網羅せんとの試は前人の未だ曾て企てざりし處なりき。

ヘロドトスの『夷寇史』が世上に歓迎せられアセイネの民會に於てアニトスの動議成立して拾メレント即ち約貳萬四千圓を著者に贈りしは西紀前四四五年にして孔子死後三十四年に當れり。アセイネの最盛時と目されたるペリクレス時代は四四四年より二九年までを指せるが、要するに當時は希臘文運の極致に達せし時なり。羅馬の古哲キケロ以來ヘロドトスは史祖と崇めらるるもパリの哲人クロチエ氏の評せるが如く史學發展史上より見ればヘロドトスは又史子なり。『之を歷史上より説けば既にヘロドトス以前より散文詩人以前より實にヘシオド並にホメロス以前より歴史の存するや明なり。蓋し人として人事に就て思を及ぼさず毫も之に説明を下さざるものは之を思議すること能はざればなり。』然れどもヘカタイオス等以上に掲げたる歴史家の著作は僅に斷片を傳ふるに過ぎざれど、ヘロドトスの『夷寇史』は不朽の價値を有し今なほ古典として愛讀せらる。佛蘭西の大史家アノトゥ氏の云へるが如く『希臘はヘロドトスの九卷にミュウズ九女神の名を冠らしめたり。實に希臘の理智的傳説はすべて茲に收められたり。』故にヘロドトスの史記はホメロス叙事詩篇の續篇と目す可きなり。『司馬遷の史記成りしは西紀前九十年、The father of history と云へば何人もヘロドトスと解せざるもの無きなり。』

ヘロドトスは西紀前三八四年、即ち孔子六十九歳の年の出生にして隨て而立の後まで郷里小亞細亞のハリカルナサスは東夷波斯皇帝の制令の下に立てり。家は名門に屬し十八歳にして既に修辭體育音樂の希臘三藝に通じたれど東夷の治下にありては公民として國事に執筆するの機會來らず、乃ち勃々たる英氣を文學に洩らさんとの志を立てたり。茲に於て博く古今の典籍を涉獵し且實地に就て書籍の記述を質さんとし足跡の及ぶ所東西南北各々一千七百哩に及べり。その漫遊を試みしは主として二十歳

より三十七歳の間に在りき。サラミスの海戦は實にヘロドトス四歳の時にあり、父老は數は當年の記憶を傳へしなる可くヘロドトス修史の志は蓋し三十歳に先ちて立てられしならん。但しクリオの卷百六節百八十四節に見ゆるアッシリア史の著述は波斯の一臣民としてスウサ並にバビロンに旅行せし際に起稿されしものなる可く伯林のレエマン教授はこの旅行を以て三十四歳頃なる可しと考證せるも首肯し難し蓋しヘロドトスは二十七歳の時故郷ハリカルナソスを去てサモス島に移住し滯留すること七八年この間郷里の暴主排斥の謀を試みて成功せるも三十七歳の時遂にアセイネに客寓したり。而してアセイネ民會の決議を以て十五タレントを贈られたるは二年の後に在り。當時のアセイネは希臘文化の中心にして文壇の明星悉く茲に集まれるも異郷の客として國事に參與し得ざるはヘロドトスの最も不快とせる所なりしもの如く四十一歳の時大希臘のツウリイに新植民地の設けらるるや率先移民の群に加はりて之が草創以來の市民となれり。爾來ヘロドトスの消息は杳として聞く所無きもアセイネその他に旅行を試みし形跡は之を『夷寇史』の記事に於て檢す可し。但し『夷寇史』は最後まで訂正増補を加へられたりと思はるれど西紀前四二四年以後のことに就ては毫も叙及しあらず。即ち四二五年に六十歳を以てツウリイに永眠せしなる可しと斷ずる所以なり。

ヘロドトスの『夷寇史』は若し之を東夷波斯皇帝入寇の歴史なりと見做さば本文は最後のポリムニア、ウラニア、カリオへの三卷にしてクリオの卷よりエラトの卷までの六卷は序言に過ぎず。ツキヂデスの八卷のうち僅に一卷のみを序言となせるに比すれば不權衡も亦甚し。然れども英人バックルの『英國文明史』の如く序論のみにて本文未だ成らず、而も一世の傑作と目さるるものあり。況んやヘロドトス修史

の目的は希臘民族と東邦諸國との關係を闡明し一は自由の政治を行ふに他は壓抑の政治を行ふこと等東西文明の比較を試みんとするにあるに於ておや。而もこの一條の脈絡を辿りて關係諸國の歴史を一切網羅記述せんとせるは世界史に統一を缺く可からざることを示せしものなりと云ふ可く、而して西歴前四七八年に筆を止めしが故近世史の一體を創めしものなりと云ふ可きなり。ヘロドトスの記事を以て悉く創見なりと斷ずるは勿論大なる誤解にしてエウテルペの卷五節に埃及をナイル河の賜物 *δωρεα τῆς ποταμοῦ* なりと云へるが如きヘカタイオスの成句を借用せるもの文學上 *Plagiarism* の非議されざりし當時に在りては敢て咎む可からず。その希臘の古傳説に對して疑惑を挿みしは又ヘカタイオスの影響を受けしものと認む可し。尤も埃及に旅行して數千年の昔に遡りてそのなほ未だ神代に達せざるを知らば何人も希臘の神代の餘りに新なるを疑はざるを得ざりしならん。エウテルペの卷九十九節に曰く『埃及に就て上述せるところは自己の觀察に基き親から目撃せる事物、親から下せる意見親から研究せる結果を説けるものなり。以下に記す所は埃及人の余に語れる所にして余は之を茲に掲ぐると共に親から注目せる點に就て之を補はん』と。ヘロドトスは決して徒らに材料の豊富を誇るものに非ず。ヘロドトスの記事の容易に棄つ可からざること就ては『史學雜誌』第參篇に坪井博士の考證あり。

ケムブリッジのベアライ教授は曾て曰く『ヘロドトスの歴史考證の原則は之を三條となすを得可し。(第一)日常の經驗と矛盾する超自然的不可思議的事件を疑ふ可し。然れどもこの原則の適用に方りて凶事の前兆は之を斥けんとせず神託夢告共に之を信じたり。(第二)相矛盾せる證據あり又は同一事件に就て異なる傳へある時は公平なる精神を以て之に對し雙方の主張を聽く可し。但しこの原則も亦アセイネ

の言ひ傳へに對しては効力無かりき。(第參) 自己觀察 autopsy と直接口頭の報道は口頭又は筆寫の又聞きの談話に優る。その弊や余は彼處に在りき故に余は之を知れりと云ふが如き初心なる獨斷に陥る可く、ヘロドトスは埃及殿堂の役僧案内人に擔がれたり』と。實にヘロドトスは神話に對しては之を輕信せざりしも近代の史實に伴ふて生ぜる街談巷説の佳なるものに至りては取て以て記事の潤飾となすことを辭せず、ギボンの評してヘロドトスは以て兒童を悦ばしむ可く以て學者を樂ましむ可しと云へるは、その好んで興味ある逸事逸語を傳へたること左傳の如きものあるが爲なり。又ヘロドトスは史料を蒐集し之を巧みに叙述するの技倆は之を具へたるも相矛盾せる言ひ傳へに就て之が取捨選擇を試むるの批評眼は之を缺けり。要するにヘロドトスの眞價は科學的なるの點に在らずして文學的なるの點にあつて存すと云ふ可く、而して綜合は寧ろ分析よりも價值多きが故にこの斷案は敢てヘロドトスを傷くるものに非るなり。

傳へ云ふヘロドトスのアセイネにありて『夷寇史』讀みの會を催すやツキヂデスも亦父オロルスと共に之を傍聽したりしが感極まつて涙滂沱たりき、ヘロドトス之を目撃して父に告げて『オロルスよ、令息は文學の天稟なり』と云ひきと。この逸語は紀年の上より見て考證家の取らざる所、アウルス・ゲリウスは西曆前四三一年にヘラニコスは六十五歳ヘロドトスは五十三歳ツキヂデスは四十歳なりしが如しとあれど、こは羅馬皇帝ネロの時代に希臘出身のハムファイラと呼べる一女子の説に基けるものなれば固より信を置き難し。ブゾオルト教授の『希臘史』にはツキヂデスの誕生を西曆前四六〇年頃なりとしクリスト教授の『希臘文學史』には約四五五年頃なりとせり。クリスト教授の説に従はんかヘロドトスのア

セイネを去て大希臘に赴きし時ツキヂデスは僅に十二歳に過ぎざりしなり。ツキヂデスの父オロルスはトラキアのスカプテ・ヒレに金鑛を有し名將キモンの縁族たり。現にブルタルコスにキモンの異母妹にしてその妻たりしと云ふエルピニケの墓碑に近くツキヂデスの墳墓を見たりと云ふ。思ふにツキヂデスは修學のその日より既にアセイネの政治の内情に通じたりしならん。西紀前四二四年にはツラキア方面の部將に任せられ戦機を失して同僚を援ふ能はざりしが爲めオストラキスモスの處分を受け四〇四年までトラキアの莊園に閉居したり。この年暫しアセイネに淹留せしも再びトラキアに北歸し西紀前三九九年には既に故人と爲れるが如し。故にブゾキルト説に従へば六十一歳クリスト説に従へば五十六歳にて逝けるなり。ペロポネソス戦役は西紀前四三一年より四〇四年まで二十七年間に亘れるアセイネ、スパルタの争覇戦にして『半島役史』は眞に現代史なり。『半島役史』八卷、第壹卷はペロポネソス半島戦役の原因を説ける序論にして第貳卷乃至第四卷には各卷三箇年宛半島役の初、九年の史實を叙し、第五卷には十年目に講和條約の成りしことより十六年目までに及び、第六第七兩卷にはシチリア遠征の顛末を述べ、第八卷は所謂イオニア戦を説きて二十一年目即ち西紀前四一一年の記事の半途にて否文章の中ばに於て突然中止せられたる儘なり。故にブルタルコスにはツキヂデスはスカプテ、ヒレにて不慮の死を遂げたりとの説をさへ掲げあり。傳へて云ふツキヂデスに一女子あり未完の原稿を保護し之を校訂者に託して以て後世に残すを得たりと。但しこの校訂者はクセノフォンなりとの説は信じ難し。

ツキヂデスの史學研究上の見識は『半島役史』第二十節乃至第二十二節に於て之を窺ふことを得べし。

曰く「當初の状態は上述の如し、尤も一々その證據に信を措くにはあらず。蓋世人は穿鑿を加へずして過去の事件に就ての他人の報告を信するの常にして、甚しきは自國の史實に於ても亦然り。例へばアセイネ人の多くはヒッバルコスはハルモデオスとアリストギトンとに殺されしときにチランノスたりきと信ずれど實はビシストラトスの嫡子にしてヒッバルコスとテッサロスとの長兄なるヒッピアスこそ政權を握りたれ。然るにハルモデオスとアリストギトンとは豫定の日のその瞬間に同志のうちにヒッピアスに内應せしものありとの疑を起し豫め注意を受けたるを以て之を刺すことを避けたり。されど萬難を排しても何事をか決行せんとの意切に動き全アセイネ行列の準備に奔走中なるヒッバルコスに偶然レオクリウムに遭ひて之を殺せるなり。而して今日のことにて未だ歲月によりて消磨せられざる多くの事實に就ても他の希臘人は正確なる概念を有せず。例へばラケデモン人の兩王は各々一票宛投票せずして二票宛投票すと云ふが如き又兩王は *Παραρτεω νόμος* と稱しピタネ人の侍衛を具ふと云ふが如き全くその事實なし。多くの人は眞理を探究するに方りて努力を吝み寧ろ從來の定説に従はんとするものなり。然れども讀者若し以上に挙げたる論證により事情は大體余が叙述したるが如しと認め、かくて詩人が之を歌ふに方て浮華の文字を以て修飾せることを斥け又史家が正確を期せずして俗耳に入り易き言語を用ゐて述べその問題には何等の證據無く多くは歲月遠く隔たりて既に小説界に入れるものを信すること無く、而して讀者若し余の述べたる古代のことは最も正確なる資料に基きて十分に立證せられたるものなることを知らば、讀者は意見に於て誤謬に陥るが如きこと無からん。而して世人は常に干戈を執て戦ふ際その當代の戰役を以て最大なるものと思惟し而もその收局するや過去の戰爭を以て更に感嘆

す可きものとなせど、而も事實その物に就て之を判断するものより見れば今回の戦役は明かに過去の戦争より大なるものと認めらる可し。扱諸氏が或は將に出陣せんとするに際し或は既に戰場に出でて演舌したることに就てはその口上を正確に記憶するは困難なり、余が親から聽けることに就ても又他の地方より余に報道せる人々に於ても同じく然り。然れども諸氏の演舌は絶えず目前に横はれる問題に就て判然と陳述せるものなりと思惟せらるるが故余は實際口述せられたる大意を失はざらんと勤めて之を記述したり。但し戦争中に起れる史實に就ては余は敢て不圖ある報告者より得たるが如き傳聞によりて之を記述することを爲さず、親から然る可しと思惟せざることは之を斥け、余が親から列席したる時の事實を取り、他人の報告に就ては出來得る限り精密に個々の點を探究せる後始めて之を採用したり。之を精査することは努力を要する次第にて種々の事件に直接關與せる人々は同一事に就て必ずしも同一報告を爲さず、何れも一黨一派に偏し記憶する所區々たり。扱余の撰述を朗讀するに方りて之を聞かば或は小説傳奇的色彩乏しきを物足らずとなすものあらん。然れども多くの人は過去に於て生じたる而して又今後復び人性に基き同一に若くは殆んど同様に生ず可きことに就きて眞實のことを知らんと欲するなる可くかゝる人々にして本書を有益なりとなさば余が望は足れり。本書は今の刹那に聽者を満足せんとの懸賞著作にあらずして永久の至寶として起稿されたるなり。』と。

最後の一句は明かにヘロドトスの大著を月旦せるものにて、ツキヂデスは更に次の節に於て過去の出來事のうちメディア事件即ち波斯夷寇こそ最大の事件なれどペロポネソス半島役は期間永くして災禍大なりと云へり。ピ、パルコスの殺害、スバルタ國王の投票數に關して謬傳ありと云へる一節も亦ヘロドト

スを非議せるものなり。然らば史學者としてツキヂデスはヘロドトスの上に立つ可き資格ありや。ツキヂデスは抑も詭辯學派 Sophists の空氣のうちに人と爲れり。詭辯なる熟字は要するにその短處をのみ現はせる譯字にしてこの學派は實は當時の學界に革命を起せる啓蒙的運動の主腦たりき。ツキヂデスこの學派の感化を受けて近世的思想を以て政治道德を批判し論理的眼孔を以て文武の制度を解剖したり。故にフリーマンは曾て政治學上の問題にて本書に於て論究せられざるもの殆んどあるなしと評せり。ツキヂデスの修史は功績を讚美することを以て目的とせずしてアセイネ、スバルタ兩國の確執に就て事件の真相を了解せんことを期し、而して専ら外交戦争のことのみを記述して地理風俗のことに叙及せず。況んや燦爛たる當代の文物に於ておや、全く特殊の意味に於ける政治史の史體を創めたるなり。竹越氏は曾て『二千五百年史を脱稿したりし時、二十七年の役成歡の戰に於ける垂死の喇叭卒の白神源次郎にあらずして木口小平なりしことを説き』目前の事すら往々此の如し、千百年前の事を論ずるまた何ぞ此過誤謬綯なきを保せん耶』と歎せしことありしが、ツキヂデスは同じく現代の事實の忽ち曖昧模稜の間に没却せらるるを見て歴史的傳説に關して疑惑を挾む可きを感じ乃ち親から目撃せる戰役を記録して之を後世に傳へんとせるなり。故に又現代史の祖たり。ツキヂデスの修史の理想は正確を第一義とし叙述を第二義とせるが故へロドトスと全くその主義を異にし同一事に就きて種々の傳説を併叙するが如きこと無きは勿論政治史に無關係の史實は一切之を閑却し去れり。人事の成敗に關してはヘロドトスの如く之を以て神意に歸すること無く *τύχη* と云へる意想外の事變をも認むるも而も盛衰は畢竟人の親から招けるものなりとなせり。前に援ける人性相等しきが故に一樣の出來事生ず可しとの意見は

史實の一回性を説ける分析的學者に對して綜合的見地を執れるものかくして始めて史學に倫理的價值ありと云ふ可し。さり乍らツキヂデスは政治上の行藏を批判するに方り純然たる政治上の立場に於てし敢て道德上の是非を試みざりき。行文の上に於てはヘロドトスに及ばざるものありと雖も希臘の史學はツキヂデスに於て發展の極致に達したりと云ふも決して誣ひざるなり。

『朱子語類』に司馬遷才高識亦高。但龜率とあり批判考證の足らざることヘロドトスの如しとの意か。朱子は又曰く太史公書疎爽。班固書密塞と。然れども通古紀傳家として司馬遷を貶し斷代紀傳家として班固を揚げたる劉知幾の言は更に深刻なり。曰く尋史記疆宇遼濶。年月遐長。而分以紀傳。散以書表。每論家國一政。而胡越相懸。敘君臣一時而參商是隔。此爲其體之失者也。兼其所載。多聚舊紀、時採雜言。使覽之者。事罕異聞。而語饒重出。此撰錄之煩者也。と、以てヘロドトスに加ふ可く、曰く如漢書者。究西都之首末。窮劉氏之廢興。包舉一代。撰成一書。言皆精鍊。事甚該密。と以てツキヂデスに充つ可し。而も更に一段の稽察を加ふる時は尙書春秋左傳國語史記漢書の六家一としてヘロドトス又はツキヂデスとその體を一にせず。若し正確にその匹儔を要めんか史記漢書は寧ろリヴィウスに比す可くヘロドトスの『夷寇史』とツキヂデスの『半島役史』とは共に一大史實の記事本末なり一大戰役の脚本なり一代の興亡を論述する時は班固の作の如く又一篇の統一ある戯曲たるを得可しと雖も而もその興味を集注すること希臘の二大史篇の如くなるを得ず。ツキヂデスのトルソと雖もなほ且ヘロドトスと共に史壇に英姿を競ふ。この史體に倣ふて椽大の筆を揮ふは人生の快事なり。而も曠古比なき世界大戰は吾人の目前に於て戰はれたり。

但し吾人がヘロドトスとツキヂデスとに就きて學ぶ可きはその紀事本末流の統一ある戲曲的史體に止まらず、實にその筆端に迸れる希臘精神によりて感激せられずんばあらず。希臘精神とは何ぞ、内に於ては壓制の政治に服せず外に對しては橫暴の兵力に屈せざる自由獨立の精神なり。スパルタ人がヒッピアスを援けてアセイネに歸りてチランノスたらしめんとし與國の使節を招きて之を圖るやコリントのソシクレスは悍然として反對して曰く「實に蒼天は地下に陥り大地は天空に飄り人類は海中に游泳し魚鱗は地上を歩行せん、ラケデモン人よ諸君は各國に於て平等を廢し民政を仆しチランノスの復位を企てんとするか、天下是より不正なること無く又是より殘忍なること無し。諸君にして眞に國家のチランノスによりて統御さるるを可とせば先づ親からチランノスを戴き次で之を他國に及ぼせ。然るに諸君は親からチランノスの政治の弊に苦まず且警戒してそのスバルタに出でざらんことを欲しつつ何をや與國を侮りて之を強いんとするか」と。是れヘロドトスのテルブシコレの卷九十二節に記す所なり。又ポリムニアの卷百三十九節に於てはヘロドトス親からクセルクセス大舉西征當時の形勢を論じて曰く「余は茲に所見を披瀝せざる可からず、假令多數の人々の感情を害することありとも余の眞理なりと認めたる點を明言せざるを得ず。アセイネ人にして若し國難の逼れるを怕れて國を棄つるか國を棄てずして留るもクセルクセスに降りしならんには何人も海上に於て之を拒ぐもの無かりしならん。扱何人も海上に於てクセルクセスを拒がずば陸上の形勢は正に下の如くならざるを得ず。ペロポネソス半島の人々假令幾條の長壁を地峽に築きたりともラケデモン人は與國に見離され（好んでかく爲すにあらず東夷は各國を征服す可ければ勢ひ止むを得ず）獨力戰場に残りかくて勇ましく戦て勇ましく死するの外無か

りしならん。ラケデモン人はかゝる最後を遂ぐるか或は之に先て他の希臘人がメデア人に黨せるを見てクセルクセスと和を講せしならん。何れにせよ希臘は波斯人に隸屬したりしなり。蓋しクセルクセスにして一度制海權を握らば地峽の城壁も亦何の用をか爲さん。かるが故にアセイネ人は希臘の恩人なりと云ふは眞理を誣るものに非ず。蓋しアセイネ人の黨せる側は何れにせよ優勝者たらざるを得ず。然るにこの際希臘は依然として自由を享有せざる可らずと信じメデア人に應ぜざる他の希臘人を鼓舞して神々に次でクセルクセスを撃退したりしは即ちアセイネ人なりと。之を讀んで心臓の鼓動を感ぜざるものは羨むに足らざるなり。ツキヂデスの『半島役史』第貳卷に據れば戰死者をアセイネ郊外の公共墓地に葬りし時ペリクレスは自國の制度の優秀なるを説きて『我國の政體は隣邦の法律を模せるに非ず。我國は隣邦の模倣者にあらずして寧ろ他國の模範たり。政治は少數の利益を主とせずして多數の利益を期するが故に名けて民主政體と呼ぶ。されど法律上に於てはすべての人個人的相違を問はずして平等なり、公職に關しては各自各々その長する所に從ひて就任し黨派の關係を問はず手腕に重を置けり、且又國家の功勞を盡し得る技倆あるものは貧乏なり迎下層の地位に沈淪すること無し。我國の政治はかくの如く自由なり、而して日常の稼業に就て嫉妬を起すものありやと云ふに隣人快樂に耽るも之を怒ることなく又面上に嫌惡の色を浮べず、是害無しと雖も又不快なり。さり乍ら私的關係に於ては互ひに快く相交ると雖も公事に於ては恐怖の念より頗る注意して犯則を避け在官者の命令を遵奉し且法律を嚴守す、殊に被害者の利益を擁護せんが爲に定めたる法律並に成文法に非すと雖も反則者の耻辱を受く可き法律を嚴守す』と云へり。アセイネ人の國家を愛するはその制度風俗のかくの如く愛重す可きが爲なり。

ペリクレンスは更に曰く『我國人は趣味に耽りて勤儉を忘れず學問を好みて文弱に流れず、富を用ゐるは活動の機會を造らんが爲にて人に語て誇らんが爲にあらず、貧乏を告白するは男子として耻づ可きことに非れど努力して以てその域を脱せざるは更に卑しむ可しとなせり』と。アセイネの制度は法律によつて貧富を平等にせんとせるに非ず各自の努力によつて貧富の不平等を減少せんとせるなり。是最も能く人性に適したる制度にしてこの自由獨立の精神こそ希臘思想の精髓たり。翻て思ふに世界大戰に於て彼我兩交戦者の心頭に燃えたるの動力も亦この精神に外ならざる可きなり。

田 中 萃 一 郎